



Original Story by  
Atelier Kaguya

# 女教師

おんなきょうし

Teacher

Novelization : Ami Utsuki

Original Illustration : M&M

著者 卯月あみ  
原作 アトリエかぐや  
原画 M & M

プロローグ

5

第1章 歌 穂

17

第2章 炎之華

57

第3章 麻 美

103

第4章 水魂都

151

第5章 理 奈

193



## プロローグ

「おら、水樹<sup>みずき</sup>。立てよ！」

「おもちゃつてのは誰かに遊んでもらってこそのおもちゃだろ！ 立って俺たちに遊ばせろよ！」

水樹浩巳<sup>ひろみ</sup>は、毎日のように苛め<sup>いじ</sup>を受けていた。

（なんで……僕ばかりこんな目に遭うんだ）

体には痣<sup>あざ</sup>が絶えることがなかった。

肉体的苦痛。

浩巳はひたすら耐えていた。男の子たちが自分を殴ること、蹴ることに飽きるまで。

だが本当に嫌なことは、この後に待ち受けていた。そう、男子に殴られ、許しを乞うことすらできなくなった頃に現われた女の子たちによって……。

「ねえ、可哀想じゃない、もうやめなよ！」

「そうよ、そうよ。水樹、こんなに傷ついて……」

四人の女の子が浩巳を庇<sup>かば</sup>うようにして取り囲み、口々に男子に文句を言い始める。その

勢いに押されたのか、彼らはお互いに顔を見合わせた。

「ちっ……るせえな」

女の子の集団にそう言われ、少年らは浩巳をその場に置き去りにする。

「可哀想にね……浩巳君、大丈夫？」

「今、手当てしてあげるからね」

男の子たちがその場を去るまで彼女たちは確かにそう言っていたはずなのに……。

だが、男子の目がなくなった途端、少女たちは豹変した。

「……ねえ、行った？」

「行ったよ。ほら、水樹、大人しくしてなよ。こんなに可愛い私たちが手当てしてあげるんだからさあ」

「いやだよ。だって……変なことするんでしょ？」

「変なことって何よ？ 普通、男だったら喜ぶもんじゃないの？ あそこを触ってあげるって言うてるんだからさ」

「や、やだよ……僕、いやだ！」

「いいから、早く脱がしちゃうよ！」

浩巳がどんなに嫌がっても多勢に無勢、女の子たちは少年のズボンを下着ごと抜き取ってしまった。浩巳が本気で嫌がっていたとしても、決して暴力を振るわないということを知っているのだ。

「ねえ、ねえ、本当に男子のオチンチンってみんなこんなふうになってるのかなあ？」

「そうじゃないの。……でも個人差があるって言うし……」

興味津々の女の子たちは浩巳のペニスに息がかかるほど顔を近付けて見ている。

「そ、そんなに見ないでよ……」

自分のモノを観察され、羞恥でますます小さくなってしまいそうだ。

「も、もうやめてよお」

小さく訴えても女の子たちは浩巳の声など気にも留めていない。彼女たちにとって、浩巳は現実的な存在ではなかった。漫画の世界にあるようなどこか現実離れしている男の子。クラスの子たちはみんな成長期で髭ひげが生え始め、声変わりだってしている。むさ苦しいという表現が似合い始めた男の子たち。しかし、浩巳だけは相変わらず女の子みたいで、綺麗なままだった。中性的な存在であることが、少女たちの抵抗感を弱めていたのだろう。そして都合のいいことに、浩巳は大人しく逆らわないのだ。

「これってさあ、大きくなるんだよね？」

「やっだあ、勃起……ってやつ？」

「ねえ、どうすればいいんだっけ？」

「確かこう……」

女子のひとり、冬美ふゆみがおもむろに浩巳のペニスを握った。不器用で遠慮を知らないその力は浩巳のペニスを勃たせるどころか、単に痛みしか与えてこない。

「い、痛いっ！　痛いよ！」

浩巳は涙目で叫ぶが、彼女たちは勃起しないことへの疑問のほうが大きいらしく、浩巳の叫びは黙殺された。

「うーん、大きくななんないよ。なんか、違うんじゃない？」

倫代みちよが首を傾げながら言う。

「あつ、確か動かすんだよ。上、下って具合にさあ」

性特集の雑誌記事でも思い出したのか、妙子たえこが言った。

「こう……かな？」

もう一度、冬美の手が浩巳のペニスを引っ張り上げる。

「そ、そんなに、引っ張らないでよお」





あまりの違和感に浩巳は身を振った。

「わっかんないなあ」

冬美が浩巳のペニスから手を離し、首を振った。

「ちよつと、浩巳。あんた自分の体でしょ！ さつさと勃たせて見せてよ」  
妙子がイライラしながら浩巳を睨みつける。

「そ、そんなこと言ってたって……」

「あつ、ねえ。ほら、啜えたらいいんじゃない？」

思いついたように倫代が言う。知ったかぶりをするお姉さんのような顔だ。

「啜えるって、オチンチンを……？」

「そうよ」

「やっだあ！ 信じらんない！」

そんな言葉を交わしつつも、女子たちは一斉にその視線を浩巳の性器に注いだ。

「私……やってみてもいいよ。なんか他の男子とかだったら変な味とかしそうだけど、水樹のだったら味しなさそうだし………んむっ！」

そう言うと、いきなり冬美が浩巳のペニスを口に含んだ。

「すっごーい、冬美って大胆っ！」

嬉々として周囲の女子が囁し立てた。

「えっ、あっ……やめ」

それまで痛みしか与えられなかった浩巳のペニス、突如熱い感触に包まれた。

咥えている冬美も興奮しているのか、浩巳のまだ陰毛も生えていない直の素肌に熱い鼻息がかかていった。

「うっ……ううっ」

もももどとするような下半身の感覚が、浩巳の背中を伝った。咥えている冬美は口内で舌をどうしているのかわからずに、ただ動かしているだけだった。その不器用な動きが、より刺激となつて浩巳のペニスに伝わった。舌が動くたびに口内の内壁に亀頭の先が触れ、尿道口が広がり唾液が逆流するような感覚が浩巳を襲う。

「やだっ……、やだよお」

自分がこんなことで勃起させられるのが嫌だった。だが、ペニスは浩巳の意思とは裏腹に、しっかりと頭をもたげていた。

「あむう……はんか、おおひふなっへひはみひゃい」

冬美は浩巳のペニスを咥えているままなのでうまく話せないらしいが、目の輝きが自分たちの望んでいる現象が起きていることを物語っていた。